

英語の代名詞システムにおける変化の要因について

真島 顕子^{1*}

A Possible Factor for Changes in a Dynamic System of English Pronouns

Akiko Majima^{1*}

This article suggests a possible stimulus for diachronic changes, especially, in a dynamic system of English pronouns; functional proximity. The East Anglian dialect provides us many interesting examples of the peculiar pronominal usage. Among them, *what* as a relative pronoun modifying an antecedent is well-known and the usage is widely spread all over the country. However, *what* never takes antecedents in Standard English; if it does, it's considered as a mistake. A possible factor for the big gap may be due to functional proximity of pronouns in the dialect. The proximity may have been promoted in the language situation at that time, stimulated by the mixture of different dialect or even language speakers. Then, some pronouns came to have similar functions, resulting in reorganization of the pronominal usage. However, we need some method to prove their functional proximity. Vectorization of their functions might help us to visually understand the proximity.

1. はじめに

英語の代名詞は、活用形の一覧表とともに授業で説明を受けることが多く、確固たる使用法が確立されている機能語であるような印象を受ける。しかし、歴史をたどってみると、例えば古英語の人称代名詞はすべて *h* で始まっていたり (*heo* for 'she', *him* for 'it', *hie* for 'they', etc.)、指示代名詞 *that* が人称代名詞のような活用をしていたり^{注1)}、*the* という語形が関係詞として使用されていたりしていたことがわかる^{注2)}。しかし、現在はそのような使用法は存在しない。代名詞は長い時間の中で様々な変化を経験して、現在の用法を確立しているのだ。

関係詞は、個別言語で独自に発達した文法カテゴリーである。現代英語では、関係詞は疑問代名詞または *that* を用いて表現されている。先行詞を修飾する用法と先行詞を含んで名詞節や副詞節を作る用法があり、後者には *-ever* を伴った *wh*-疑問代名詞と *what* が当てはまる。

現代英語において、関係詞 *what* は常に先行詞を内包し、先行詞を取ることはない唯一の *wh*-形関係詞と説明される。しかし、実際の運用においては、*what* が先行詞を修飾する用法が、高い頻度で方言に見られる。以下の例において、関係詞 *what* が関係節を導き、先行詞 *book* を修飾している。特徴づけ

でない限り現代英語の文語体に現れることのない本用例は、いつ頃生まれたのであろうか。

A book *what* I read.

(Trudgill (2023: 108))¹⁾

古英語にも本用例と類似した用法は見ることができ、中英語期にも極めて稀である (Mustanoja (1960: 194))²⁾。現代英語になってはじめて、East Anglia 地方の方言を記述した Forby (1830: 138)³⁾に、関係詞として確立した先行詞を取る *what* の用例を見ることができる。そこでは、*what* は先行詞が人でも物でも使用することができると説明されている。

The woman *what* came yesterday.

(Forby (1830: 138))

East Anglia 地方にある Norfolk では、*what* はあらゆる先行詞と使用できる唯一の関係代名詞であると説明する本もある⁴⁾。そして、本用法は現在では East Anglia 地方のみならず、イギリスの広い地域で見られる^{注3)}。標準語や学校文法では誤りとされる用法が、イギリスの広い範囲で標準的に使用されていたり、方言によっては唯一の用法として採用され

*1 日本大学

ていたりするという。英語という一つの言語の中に現れるこの多様性はどこから生まれたのであろうか。

2. 英語代名詞の歴史的変化

英語は、総合的な言語と言われる古英語から、分析的な言語と言われる現代英語へと、時間と共に変化していった。その中でも大きな変化は、活用語尾の衰退である。代名詞もその例外にもれず、指示代名詞の活用形からは *the* と *that* を残すのみで、他の活用形は使われなくなってしまった。また、*h-* で始まる人称代名詞の活用形も維持することができず、徐々に *heo* は *she* に、3 人称複数形はすべて *th-* 形 (*they; their; them*) へと交代してしまった。

語頭の音が大きく変化した要因に、音変化により起きた代名詞パラダイム内の混乱が挙げられる^{注 4)}。動詞や名詞の活用形も衰退していたため、他の語からも文法機能の情報を得られにくくなっていた。女性単数主格の人称代名詞 *she* や 3 人称複数形の *they; their; them* が使用されるようになった要因として、音変化や指示代名詞の影響、古ノルド語の影響などが挙げられる⁵⁾。いずれにしても、指示代名詞が人称代名詞のように性数格の情報を保って活用をしていたために、指示代名詞と人称代名詞はある程度相補的に使用することができたのかもしれない。

代名詞の相補作用を示す可能性のある例を、現代英語の方言に見つけることができる。現代の Norfolk 方言の指示代名詞において、*that* の複数形には 3 人称複数形人称代名詞の *them* が使用される。

Eat you them carrots.

‘Eat those carrots.’

(Trudgill (2003: 47))

Poussa (2001: 246)⁶⁾によると、Norfolk 方言における指示代名詞 *that* の使用法が多岐に渡っていたことが、関係詞の使用法に影響した可能性があるという。また、*it* は *that* の弱形で、*that* は主語として、*it* は目的語として使用されるという。Trudgill (2023: 103) は、強調構文や天気を表す人称代名詞 *it* に指示代名詞 *that* が日常的に使用される例を挙げている。

That’s raining.

That’s cold today.

That was me what done it.

(Trudgill (2023: 103))

古英語の関係詞は、指示代名詞、不変化詞 *þe*、またはその複合形で表現されていた。中英語からは、疑問代名詞 (*wh-* 形) または不変化詞 *that* で主に表現されている。いずれにしても、関係節は代名詞、あるいは接続詞 (の一部) としても使用されることのある不変化詞、もしくはその両方を用いて表現されてきた。代名詞それぞれの活用形は定まっていたものの、現代英語においては異なるカテゴリーの活用形を柔軟に利用しながら、関係詞構文は発達を遂げてきたと言えるかもしれない。

3. 変化の要因

East Anglia 地方の英語代名詞内で見られる柔軟とも思える使用法は、どのような背景を持って生まれたのであろうか。

Poussa (2001: 246) は、East Anglia 地方の *that/it* の使用法に、古ノルド語の影響を指摘している。East Anglia 地方は古英語時代にはデーンローに位置し、そこに住む人々はバイキングと共存していた。Trudgill (2023: 13) は、古英語話者と古ノルド語話者がそれぞれの言語を用いて相互理解がある程度可能であったろうことから、その当時の言語状況を *bidialectalism* と呼んでいる。そのような状況下では、機能語へも及ぶ深い影響を、古ノルド語から受けたであろうことは想像に難くない。

その後 Norfolk の Norwich は経済的な発展を見て、ロンドンに次いで第二の経済都市となった。北海を挟んでオランダとの交易も盛んで、宗教改革によって大陸からオランダ語、フラマン語、ワロン語話者が流入し、1579 年までには Norwich の人口の約 40% 近くが英語母国語話者ではなかったとの報告もある (Trudgill (2023: 23))。他方言話者や他言語話者で町が賑わっていたことが想像できる。

What を唯一の関係詞として使用する言語が他にもある。南アフリカ及びナミビアで使用される言語の一つである Afrikaans 語である。Afrikaans 語は 16 世紀に入植したオランダ人の言語から発達した西ゲルマン語に属する言語である。その使用される場所や国の歴史的背景を考えると、Afrikaans 語が特殊な発達を遂げているのであろうことは容易に想像ができる。

die man wat daar staan

‘the man who stands there’

(桜井(1985: 101)) ⁷⁾

Afrikaans 語と英語の Norfolk 方言を結ぶ言語にオランダ語があり、*what* が不変化詞としての関係詞となった経緯にオランダ語の影響を考えることもできる。しかし、現代英語と同様に、現代オランダ語でも *wat* ‘*what*’ は先行詞を取らずに関係節を作るため、Afrikaans 語の関係詞の使用は、独自の発達であることがわかる。

以上のように、様々な方言や言語が混ざった状態であった East Anglia 地方の歴史的背景を考えると、その土地のことばの使用に特徴が現れることは当然のことのように感じられる。特に総合的言語から分析的言語へと変化を遂げる中で、活用語尾が大幅に水平化されつつあり、他方言や他言語話者との意思疎通を容易にするために、人称代名詞が、類似した機能を持ち、より指示性や有標性の高い他の代名詞の語形を活用することは、自然の流れであると考えられる。性数格による活用形を持つ人称代名詞と指示代名詞の機能（前方照応と指示性）の近さが、他言語や他方言話者とのコミュニケーションのために柔軟に利用され、現在の East Anglia 方言を形作ってきたのではないだろうか。

4. 今後の展望

英語の人称代名詞と指示代名詞がともに性数格に従って活用していたことで、機能の類似性を利用し、方言レベルではパラダイムを超えて柔軟に独自の表現が使用されていた可能性がある。しかし、その機能の類似性は、どれほど類似していれば相補的に利用可能となるのであろうか。

また、関係詞 *what* は口語体で使用されることが多く、文語体にはあまり現れない。しかし興味深いことに、Norfolk 方言で書かれた聖書の一部には、同様に方言で使用されると言われている関係詞 *as* は現れるものの、関係詞 *what* は一例も現れない⁸⁾。同じ方言内であっても、コンテキストによって使用法が異なるようだ。

我々が感じる機能の類似性やコンテキストの違いは、感覚によるところが大きい。Norfolk 方言で、*it* の代わりに、同様に活用する *þis* ‘*this*’ではなく、*þæt* が選ばれたのも、「近さ」などを尺度に用いて説明することはできるが、その「近さ」を客観的に示すことは難しい。

従って、今後は資料で使用される用例の機能を、Word2Vec 等を用いてベクトル化し、それぞれの代名詞が担っている機能を比較考察していきたいと計

画している。内容語ではなく機能語の特殊な方言用法を扱うことに十分留意する必要があるが、それぞれの語形が持つ人称代名詞や指示代名詞以外の機能（接続詞の *that* や疑問代名詞の *what* など）も考慮に入れ、現代の文法範疇区分やパラダイムの中だけでは収まらない使用法が与える言語変化への影響を考察したい。

文献

- 1) Trudgill, Peter, *East Anglian English*, Dialects of English Volume 21, De Gruyter Mouton, 2023.
- 2) Mustanoja, Tauno F., *A Middle English Syntax*, Part I, Parts of Speech, Société Néophilologique, 1960.
- 3) Forby, Robert, *The Vocabulary of East Anglia*, Vol. I, F. B. Nicholas and Son, 1830, Repr. David & Charles Reprints, 1970.
- 4) Trudgill, Peter, *The Norfolk Dialect*, Poppyland Publishing, 2003.
- 5) 小倉美知子, 『変化に重点を置いた英語史』英宝社, 2015.
- 6) Poussa, Patricia, ‘Syntactic change in north-west Norfolk,’ in Jack Fisiak and Peter Trudgill eds., *East Anglian English*, D.S. Brewer, 2001, 243-29.
- 7) 桜井隆編, 『アフリカーンス語基礎 1500 語』大学書林, 1985.
- 8) *The Song o’Sorlomon, being The Song of Solomon*, trans. into Norfolk dialect by Revd Edward Gillett, The Larks Press, 1993.

注記

注1) 古英語の人称代名詞（3 人称）と指示代名詞の活用は以下の通り（小倉（2015: 26-27））。

・人称代名詞（3 人称）

	m.	n.	f.	Pl.
Nom	hē	hit	hēo	hīe
Gen	his	his	hi(e)re	hi(e)ra
Dat	him	him	hi(e)re	him
Acc	hine	hit	hīe	hīe

・指示代名詞

	m.	n.	f.	Pl.
Nom	sē	þæt	sēo	þā
Gen	þæs	þæs	þære	þāra
Dat	þæm	þæm	þære	þæm
Acc	þone	þæt	þā	þā

注2) 古英語の関係詞として使用される *the* は、不変化詞 *þe*

で、*p*は現代語では *th* と表記されることから、*the* と記した。不変化詞 *be* は、*for bæm be* ‘because’のように、接続詞の一部としても使用された。

注3) *What* が先行詞を取る例は、関係詞を扱う英国方言研究では至るところで示されているが、Herrmann(2005)が特に詳しい。

Herrman, Tanja, “Relative clauses in English dialects of the British Isles,” in *A Comparative Grammar of British English Dialects, Agreement, Gender, Relative Clauses*, Bernd Kortmann, Tanja Herrmann, Lukas Pietsch, Susanne Wagner, (eds.), Mouton de Gruyter, 2005.

注4) 人称代名詞のパラダイムに混乱が生じていることがわかる例として、イングランドの南西部の例を挙げる。ここでは現在でも、人称代名詞の主語が目的語として、また目的語が主語として使用される例が見られる。

Next time I ketch him out along o'**she**,

Blest if I don't give **he** “good arternune”.

(Trudgill (2023: 102))